

企業スポーツ部の解散から再生まで

ークラブチームAを事例としてー

スポーツクラブマネジメントコース

5011A303-1 石井 光暢

研究指導教員：間野 義之 教授

1. 諸言

戦後長らく日本のスポーツ文化を牽引してきた企業スポーツが、バブル崩壊を境に次々と休廃部する事態が起きていることは、周知の事実である。東欧の「スマートアマ」に対して「企業アマ」とも呼ばれ、独特のシステムとして世界的にも有名だった日本の企業スポーツが平成大不況とともに、壊滅状態に陥っている²⁾と報告されている。事実、1994年ごろから熊谷組野球部・バスケットボール部、住友金属男子バスケットボール部・バレーボール部、ニコニコ堂野球部・女子陸上部・ラグビー部といった日本一の経験もある名門チームの休廃部が毎年のように発表されるようになった。

そのような状況の中、クラブチーム化への移行を模索する企業スポーツチームが増えてきている。企業スポーツのクラブチーム化の動向を見てみると、同好会型、企業連携型、地域主導型、企業主導地域支援型、地域主導企業支援型のおおむね5つのパターンに分類²⁾できるとされている。

表1 企業スポーツチームの分類（左近允2002より）

	チーム名	前企業	種目
同好会型	多数あり		
企業連携型	トップス広島	サンフレッチェ広島 JT 涌永製薬 イズミ 広島銀行 広島ガス	サッカー 男子バレー 男子ハンドボール 女子ハンドボール 女子バスケット バドミントン
地域主導型	ヴィガしらおい 日光アイスバックス ニッポンランナーズ SCC さいたまブロンコス	大昭和製紙北海道 古河電工 リクルート 城山観光 マツダ	社会人野球 アイスホッケー 陸上 陸上 男子バスケット
企業主導 地域支援型	堺プレイザーズ	新日鉄堺	男子バレー
地域主導 企業支援型	釜石シーウェイブス 広島メイプルレッズ	新日鉄釜石 イズミ	ラグビー 女子ハンドボール

この5つのパターンの他にクラブ所有型という形態が存在し、それは一つの企業がチーム

（スポーツ部）を所有する形であり、運営費や練習場所はすべて企業が保障している形態⁴⁾と位置づけている。

2. 目的

本研究では、クラブ所有型として活動していたチームにおきた、「クラブ所有をしていた企業がチームを手放し一旦は解散をしたものの、クラブメンバーが主導となって複数スポンサー企業からの支援を受けながら再生を果たした」というクラブAの形態を「クラブ主導企業支援型」と定義した。2008年におきたクラブAの『スポンサー撤退から「クラブ主導企業支援型」として再生を果たす最大の原動力』になったであろう、「集団への同一視」を高めたものを類推することで、チームビルディングの方策の一つを提言することを目的とする。

3. 研究方法

3-1 調査対象

本研究の調査対象としてクラブAを含む3クラブを選定した。クラブBは歴史・実績・現在の運営形態においてクラブAと類似性が高い。クラブCは実績・現在の運営形態においてはクラブAとの類似性は低い。クラブAと類似性の高いクラブBとクラブAと類似性の低いクラブCを調査対象とした。

表2 調査対象3チームの概要

	クラブA	クラブB	クラブC
設立	1980年	1975年	1981年
設立時運営形態	企業スポーツ部	高校OB会	企業スポーツ部
現運営形態	クラブ主導企業支援型	クラブ主導企業支援型	クラブ所有型
2011年成績	Xリーグ3位	Xリーグ1stステージ敗退	Xリーグ1stステージ敗退

3-2 方法

調査対象である3クラブのメンバー全員に対し質問紙調査を実施した。回収期間は平成23年10月24日～11月29日とした。回収結果はクラブAが配布数66通のうち50通回収（回収率75.7%）、クラブBが配布数58通のうち24通（回収率41.3%）、クラブCが配布数47通のうち32通（回収率68.0%）を回収した。全体配布数174通のうち回収した106通（回収率60.9%）を回収し、解析対象とする設問について回答の不備はなかった。調査項目は集団同一視尺度及び情動的コミットメント尺度並びに集団フォーマル性尺度を用いた。

3-3 統計解析

有意水準を5%とし、一元配置分散分析を行った。有意だった項目のみLSD法を用いた多重比較を行った。IBM SPSS Statistics19を統計解析に用いた。

4. 結果

3チーム間の各因子の平均値の比較を行うために一元配置分散分析を行った。その結果、4因子全てに主効果が認められ、4因子ともに有意な差があることが明らかになった。HSD法による多重比較を行った結果、クラブAの平均値は全ての因子において他の2チームの平均値に対し、有意に高いことが認められた。

分析結果を更に深めるために、因子内項目において一元配置分散分析を行い有意差が認められた項目のみLSD法による多重比較した結果、逆項目である「Q4」の「ほかのチームに替わっても、いまのチームへと同じくらい容易に、そのチームに適用できると思う」という項目のみクラブCがクラブAの得点に対し、有意に高いことが認められたが、その他の項目についてはクラブAの得点がクラブB、クラブCを有意に高くな

った。

5. 考察

本研究の結果により、クラブAはクラブB、クラブCと比べ次のような取り組みや仕組みや資源に違いがあることが明らかになった。①明確な目標を持っている②地域社会とのかかわり③指導者の経歴④指導体制、仕事の役割分担⑤規則の文書化などである。これらのことが、成員への同一化、集団に対する同一化、集団が持つフォーマル性、情動的コミットメントを高めたと考えられる。

6. 結論

結果によって明らかになったクラブAの違いについて、特に「規則の文書化」についてはクラブAのみが行っていた取り組みであり、結果、組織のフォーマル性を高め、同一視においても高い値を得ることに重要な要因になったと考えられる。あわせて、目標に期限を設けること、コーチ陣の役割分化、アメリカンフットボールが持つ競技の特性から指導者の経歴なども組織のフォーマル性を高める重要な要因となったようである。「地域社会とのかかわり」についてはクラブAへのインタビュー調査でもわかったように、競技外での協働が成員への同一視を高める結果に繋がったと考えられる。

本研究の結論は、これらの組織のフォーマル性や成員への同一視を高める取り組みや仕組みが、「チームへのプライド」や「チームへの愛着」といった組織への同一視を高める結果となったと考える。